

東方鶴鶴鶴

閃艦

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

友人とファミマに来ていた主人公

店内にいた頃トラックが突っ込んで死に

白い世界にいつの間にか眠っていた

目次

神様脅すのはやばい	1
第2話	6
主人公、転生してすぐ犯罪に手を染める	9
空腹・・・！圧倒的空腹・・・！	13
妖怪、家を貰う	16

神様脅すのはやばい

ドゥモ ミナサン シュジンコウデス
えっなんで話しかけてきてるんだよこ野郎だつて？
気にしたら負けなのだよワトソンくん
そして現在進行形でパニックなのデス

なんで辺り見渡しても白い世界しかないの？ねえなんで？
思い出せ・・・思い出すんだ・・・

今日は12月
リア充が爆破する日だ
マジでパルパルパルパル
本つつつつ当に厄日だ

「まあまあ落ち着けて」
こいつは友人の新宮一樹
やたらと東方の話をしてくる変じゲフンゲフン
いつも東方のキャラに囲まれたいとか言つて変人

「今何か言つたか？」
「貴様ツ心読めるのかッ」

「読めねえよ」

「あとそれはいいとして落ち着けるわけねえだろホビロン食わずぞ」

「何故!?! いやそんなことよりお前イラつきすぎだろ!?!?」

「当たり前ダルルオ!?!? こんな日に外で歩くのはストレスすぎて

はげるぞ?!?!?」

「勝手に上げてどうぞ。そんなことよりお前何の用で呼び出したんだ?」

「まあ待て。外で話すよりコンビニに入って話をしよう」

「なんでコンビニなんだよ・・・まあいいけどさ」

「それでお前最近金欠じゃねえの?」

「えっ何言ってるんだお前が払ってくれるんだr痛い痛い!?!? やめて

!

「骨折れちゃうー!」

「チツ簡単に折れないか・・・」

「何こいついつからこんな黒くなったの?」

「なんか言ったか?」

「滅相もございません」

「まあいいやファミチキ食うか?」

「おいおいコンビニの中で食べるなよ」

「いいじゃねえ「危ない!」・・・えっ?」

「そうだ・・・」

「新宮が話してたらトラックが突っ込んできて・・・」

「ということはこのこは死後の世界か?」

「なんか全然イメージと違「それについては私が説明しましょう」」

「って誰だお前は！」

「地獄からの使者 スパイダーマツ・・・じゃなくてですね」

「私は神です。」

ああ可哀想に・・・こんな幼女までもが厨二病になる時代になって
しまったのか・・・」

「いや私これでも百万年生きてますからね!!?」

あと幼女って呼ぶのやめてくださいー！」

「H A H A H A こんな幼女が百万年生きてる訳がな i 痛い痛い!!? や
めてください死んでしまいます!!?そしてデジャブ!!?」

~~~~~神様説明中~~~~~

「えくとつまり神様の遊びで死んじやったってこと?」

「まあ・・・はい。私の部下の者が遊び半分でちよっかいをかけてたら  
力の調整を間違えてしまいました・・・」

「じゃあこれからどうすればいいんだ・・・?」

「はい。今回はこちらの責任ですので転生という形になりますが、そ  
れでよろしいですかね?」

「えっ転生?つまりまたリア充ばっかいる世界に行かなきゃいかんのか?」

「だめですか?」

「それだったらもう転生しないでいいです。ハイ」

「そうですか。なら転生の準備しますね・・・えっ?」

「転生しないでいいです。」

「いやお願いします！転生させないと上司に怒られるの私なんですからー！」

「けどあのリア充ばっかの世界に転生とか嫌です」

「・・・つまりあの世界以外ならいいんですね？」

「えつまあうんそうだけど」

「それなら他の世界でいいですから転生してください・・・」

「それはもしかしてアニメとか漫画の世界も行けるのか？」

「いやそれはちよつ「あーそれだったら転生しないわー残念だわー」・・・」

「わかりましたしますから・・・」

「計画通り」

「はあ・・・それだったらどこの世界がいいんですか？」

「んー・・・どこにしよう」

「迷ってるなら先ほど転生した人と同じところに飛ばしますけど？」

「どこの世界だ？」

「東方projectの世界ですね」

「・・・おい誰だその世界に行ったやつ」

「多分あなたのご友人ですね」

「やっぱりか・・・」

「それでどうします？」

「うーん・・・東方ねキャラに転生することは出来る？」

「出来ますね」

「じゃあ鶴にして貰おうかな」

「あなたも変態だったんです「あー転生するきなくなつたわー」ごめんなさいー」  
「めんなさいー」

「あと東方ね世界に行っても無双とか出来ないよなあ」

「・・・なんですか？」

「無双させて欲しいなーけど出来ないよなー」

「もうしてあげますよもう・・・」

「よっしや！これでもう転生するだけだよな？」

「はい。それでは早速始めますね」

「了解」

「あと無双のことですが一つ」

「なんだ？」

「転生するのは世界が想像された直後ですから気をつけて下さいね  
(ニッコリ)」



## 第2話

3行でわかるあらすじい!

you事故で死んだYO!

神様のおかげでぬえええに転生できましたYO!

神様鬼マジ鬼

語彙力無さスギイ!

とこんな感じなのですよ

え?何?3行じゃないだろこのボルシチ野郎だつて?

君のような勘のいいガキは嫌いだよ。

まあなんやかんやあってせかいが創造された直後に転生するとか何なの?馬鹿なの?死ぬの?

いやね?ぬえに転生させてくれたのはいいよ?

そのおかげでか知らないが身体能力が凄い上がってるんだよ。うん

特にAPPとかAPPとかOPPとゲフンゲフン

まあ色々と試してみたわけよ?

そして色々試してる間に気づいた……

食料がぬえ……

そう!

圧倒的に食料が無いのだ

やべえよ……やべえよ……

どうすりゃいいんだよ……

「ふふふ、それに関しては心配ご無用ですよ!」

この声!そしてうざったらしい喋り方は!

「スパイダーマン!」

「そう!私こそがスパイダーマン……って何やらすんですか!」

「ノリノリで言ってたくせに何こいつ」

「もう!せつかく食料が無いって言うから心優しい私が飛んできましたのに!」

「何？心優しいって？H A H A H A H A H A H A 異世界に来て耳が壊れたようd痛い痛い!?!やめて！ぬえの腕折れちゃう！折れちゃうから！」

くく神様説教中くく

「……でありまして、人や妖怪が生き抜くにはこうしないといけないのです。分かりましたか？」

「は、はひ」

「よろしい、では数日分は置いてくから何かあつたらまた言いなさいよ？」

「分かりました……」

「では帰りますね」

そういつて神様は消えていった……

そう言えばあの神様途中から口調変わったけど何でなんだろうま、いいや

取りあえず明日に向けて準備しなくちやな

まずは……寝床用意しないとな

「そこら辺に木でも転がってないかなー……」

「木なら創造出来るけどいる？」

「マジ？じゃあ貰いますわ」

いやーこの時代にもいい奴がいるんだな……あれ？

今世界創造直後じゃないの？じゃあこいつ誰？

「誰だお前は！」

「地獄からの使者、スパイダーマツ！」

「名乗れイ！さもなければ押し倒す！」

「ありがとうございます！我々の業界でもご褒美です！」

ブルツ

今凄い背筋が凍りついた気がする……

何やねんこいつ

「ふっふっふ、貴様は今日の前にいる変人は何者か考えているだろう！そうだろう！」

あつ変人の自覚あつたのねん

「キヤーヘンターイ喰らえドロップキイイック」

「な、何故だアグフウ」  
危機は去った

主人公、転生してすぐ犯罪に手を染める

ハツハツハつこんにちわ諸君☆

ぬえに転生した主人公（笑）だ☆

そして画面の向こうの皆に聞いてもいいかな？☆

地面に転がってるこいつ誰やねん。

いや本当に誰だよ・・・

それにポーズが完璧にヤムチ○です本当にありがとうございm)r

y

それにしてもこのヤムチャ起きないのかなあ

まあ蹴り倒したのは自分自身なんだがな！

まあ・・・取りあえず引きずって行くか

少女（？） 移動中

「はあ・・・はあ・・・」

1時間ぐらい探したが何も見つからねえ・・・

それにこいつ重いよ！誰だこんな奴連れてきたの！↑

はあ・・・仕方ない

顔面に蹴りいれたら起きるだろ・・・起きるよね？

さつきから死んだように寝てるけど

・・・いや 寝てるこいつが悪い

「そおい！」

グチャア

(アツアカン何か潰れた音しとる)

と、取りあえず安全か見た方がいいよな！

どう考えても安全じゃないだろうけど……

いやけどグロイの嫌だしそれでも見なくちゃいけないしいやどう

S

「ア……ア……ア……ア……」

### ☆現状報告☆

ただいま先程の場所から……どのくらいだろ？

三十分はダッシュしたはずだけど

それにしても本当に体のスペック凄いな

ダッシュしたのに全然疲れてないぞ……

精神的にはすっごい疲れたけどな！

閑話休題

さっきの男は置いてきた

まあ是非もないネ！

あんなの連れてきても面倒だし重いし運ぶのたるいし

本人が気絶する前に創造出来るとか言ってたけど

まああれが遺言だから気にする必要もなし

ギユルルルルルル

.....腹減ったなあ

「それなら人類が登場するまでは

お腹がすかないようにしましょうか？」

「またお前か！.....と言いたいが今はそれどころじゃないし頼む」

「いや言ってるじゃないですか.....取りあえずそうしときますね」

「ああ、頼む」

「りよーかいです」

本当こいつ何の前触れも無く現れるな.....

とつ、そんなこと考えてたら段々マシになってきたし

これからの事でも考えるか

まずこの世界には何も無いしなあ.....

.....  
.....ここは？  
.....

.....そうか、あのど畜生な神に転生させられたんだっけ

考えている間に寝たんかなあ

ま、いいや。妖怪だから寿命は長いだろうし気楽にやっていくか

んじやまたそこら辺をほつつき歩いときますかねえ

いや待てよ？

そういえば東方の住民ってほとんどが空飛べるよな？

今空飛べるのかな.....？

.....よし、試そう

フワア

「おっ？」

浮いたああああスゲエエエエエエ

アレ？ちよっと待て凄いですピードで落下していつてるんですけど

どおおおお

ウワアアアアアアアア

空腹・・・！圧倒的空腹・・・！

・・・ここはどこだ？

・・・鳴呼、そういえば変な野郎（神）に何やかんやあつて  
転生させられたんだっけか・・・

そして紳士（笑）に会ったり空飛んで落ちてたり・・・

・  
・  
・  
・  
・

あれ？じゃあなんで自分傷一つないんだ？

改めて体を見ってみるが傷らしいものは一切ない。

それに周りも木々が生い茂っていて暗い・・・え？

待て待て待て、落ち着こう、素数を数えよう。

1・3・3・4

よし！大体は把握してきたぞ！

今の状況を説明すると

←

落ちたアアアア

←

傷一つねえ！ヤベエ！

←

あれ？なんで木々が生い茂つ（ry

という事だよな？

・・・よくよく考えなくても酷い状況だなこれ  
それにしてもこの木・・・



「美味そうだな．．．．．」

．．．．．やめろ、そんな哀れみの目でこつち見つめんな。

自分でも美味そうって思った時には末期かと思ったよ、うん。

けど何やかんやあって自分この世界に

来てから何も食べて無いんだぜ．．．．？

人は空腹に勝てないのだから仕方ない

ということ．．．．

「いただきますあーs」

「そこに誰がいるの？」

お願いだから食事の邪魔をしないでくれ．．．

そんなことを思いつつ振り返ってみるとそこには．．．．

警戒心バリバリの少女がいるではありませんか！

物騒なことに手には弓持つてるけどな

「そ、そのの貴方！こんな所で何をやってるの！」

「あく．．．．うん、まず一ついいかね？」

「な、何よ！」

「先に木を食っていいかね？」

「．．．．はあ？貴方バカ？」

ええ．．．．木を食うのってそんなに変なのか？

まあ現代ではそんなこと言ったやつはドン引きされて

1人になるのが目に見えるがな！

「いやいやお嬢ちゃん、人はやらなくちゃ

いけないって時もあるんだぜ？」

自分でも何言ってるんだろうね．．．

目の前の少女は困惑してるって言うか、

もはや恐怖でしか無いだろうな

「取りあえずこの木は食わせてもらうぜ？」

腹が減って死にそうなんだ」

「ま、待って！その木は毒が……」  
後ろで何か喚いてるが気にしない、今は取りあえず目の前の気を

・  
・  
・  
・

あれ？なんか眩暈が……しかも吐き気がする  
これもしかして……やばい？

――少女視点――

はあ……こんな時に不審者を見つかるんじゃないか……  
全くもう！最近は何市の方も忙しいのに！

妖怪やら壁の修復やら研究の許可やら……  
何で忙しいのにこんなにも面倒な事が続くのかしらね？

それにあの人……とんでもない量の妖力を持っていたし……  
ああもう！取りあえずこいつを引きずって帰りましょう！

## 妖怪、家を貰う

ふわぁ……よく寝た

えーつと、起きて早々何で見知らぬ部屋にいるのか  
そんなことはどうでもいいんだ、重要な事じゃない。

目が覚めたら見知らぬ場所にいるなんてもう慣れた  
慣れちゃ行けない気もするけど仕方ないんだ…

で、一番驚いてるのは目の前に森で会った少女がいる事だ  
凄く嫌な予感がする……

・

・

・

・

逃げよう☆

そうと決まればすぐに行動に「あら？ 起きたのかしら？」

……畜生めえ

少女説明中

なるほど、木を食ったら倒れたので都市に運んでくれたと

この子に助けられなかったらマジでやばかったかもしれない

この体のスペックだから何やかんや生きれそうだけどね

「ちよつと！ あなた話聞いているの!?!」

イマハセツキヨウサレテルケドナー

「はいはい、聞いてますよ」

「全く……あなたのせいで月夜見様に色々追及されて

大変だったんだからね！」

「じゃあ何で助けたんだよ！ いや、助けてくれたのは勿論感謝して

るけども」

「それは……はあ……もういいわ。ちよつとついて来なさい」

「しゃーなしだぞ」

「何であなたが上から目線なのよ……」

全くこれだから最近の少女は……忍耐力が足りん

何？ お前も忍耐力とその他もろもろが足りないって？ 黙れ小

僧

しかし背が低いと周りの見える景色も全然違うんだな

さて、少女の後をについて行くか

少女移動中

ガヤガヤガヤザワザワキヤツキヤツ

えっ 何でこんなに凄そうな家とかたつてんの？

ここ幻想郷が出来る前の世界だよね？

あいつ（神）転生させる世界でも間違えたの？馬鹿なの？死ぬの？

くそっ！ハメやがったな！

周りに工場とかあるし絶対違うだろ！いい加減にしろ！

「ほら、着いたわよ」

そう言つて少女が指さしたのは周りの建物よりも一回り大きい建物

何となく市役所？みたいな雰囲気がある

「何ぼさつとしてんのよ。私も忙しいんだからさつさと歩きなさい」

中に入ったら色々な施設があつた

研究所？とか食堂、銭湯で他にも気になるものがあつたが

今は取りあえず少女について行かなければならない

しっかし少女はこんな所に連れてきてどうするつもりなんだ？

「なあ、何でこんな所に連れてくるんだ？

たかが森で倒れている旅人だぜ？」

「その事も後々話すわよ」

そっけねえ……

## 少女移動中

「はいよ。」

と言われ着いたのは周りの扉より頑丈に作られている部屋であった

周りに衛兵？さんもいるし本当に大丈夫なのだろうか……？

更に少女が「絶つつつつ対に部屋の中で無礼なことをしたら駄目だからね!?下手したら首が飛ぶんだから!」らしい

一応少女には助けられた恩があるしなあ……仕方がない

この海よりも深く宇宙より広い寛大な心で申し出を受け入れてやろう

「旅の者を連れてまいりました」

「ふむ、この者が気になると?」

そこに座っていたのは少女、いや大人になりかけの独特の雰囲気がある女性、とでも言えばいいのだろうか

女性はいかにもなゴージャスな服やアクセサリを付けており

建物の雰囲気と相まって威圧感がある

そう、まるで何百年も生きている歴戦の猛者と同じ威圧感っぽい  
まず歴戦の猛者と会ったことないから本当に感じただけだともね

「ちよつと!ちよつと聞いているの!」

「聞いているでござる」

「じゃあ早く名乗りなさいよ!本当に聞いてたの!」

名前か……封獣ぬえでいいかな

後々名前が違うとか言われたりするの嫌だからね

「我は封獣ぬえ。天界より舞い降りし「なに言ってるのよ!ちゃんと名乗りなさい!」……そこらでさまよってた旅人です」

「…人…ねえ?」

「ああん?嘘を言っているでも?」

「まあ、いいでしょう。永琳、最近外壁近くの家が空いたわよね?」

「…?確かに最近は穢れを嫌って内側に移住する民がいますが…」

「1番外壁に近い家にこの者を住ませときなさい。いいわね？」  
「大変失礼ですが何故このような者に？都市の中では教育受け、

仕事に就いたものだけが家を持つべきです」

少女の言い方に少しイラツと、いやかなりイラツとしたがそれより  
重

要な事がある。穢れとか訳分からん言葉も出てきたがこの際は何  
でも

いい。少女が言うことも最もなのだ。

いくらお人好しといつても家を与えるなんて……

この世界の物価とかが安いからとかいう理由も考えられるけどな  
「いいのよ、このままほつといて暴れられでもしたらそれこそ

被害が出るでしょう？」

「そんなもの兵士に任せれば被害を出す前にでも捕えられますが……」

「そいつね、多分軍の上位連中より強いわよ」

「何を言ってるのですか！私が管理している軍が倒されるはず……」

「永琳」

刹那、月夜見から神々しいオーラが周りに放たれた

この体を持つてしても一瞬動けなくなるほどに……